
 原 著

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 2
P.1 - 10 (2013)

病院内における臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラム 構築のための基礎的研究

A Basic Study on the Establishment of a Career Development Support Programs for Clinical Training Instructors at A University Hospital

近 藤 ふさえ ¹⁾ KONDO Fusae	田 中 ひとみ ²⁾ TANAKA Hitomi	堀 込 克 代 ²⁾ HORIKOME Katsuyo	佐々木 史 乃 ¹⁾ SASAKI Shino
濱 口 真知子 ²⁾ HAMAGUCHI Machiko	桑 村 淳 子 ¹⁾ KUWAMURA Junko	土 屋 清 子 ¹⁾ TSUCHIYA Kiyoko	稲 富 恵 子 ¹⁾ INATOMI Keiko

要 旨

目的:本研究は、臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラム構築の基礎的な研究と位置づけ、病院内における臨床実習指導者研修を受講する看護師の臨地実習指導の体験をとおしての学びを分析し、キャリア発達支援プログラムの課題を明らかにすることを目的とする。

方法:某大学附属病院の現任教育プログラムの一つである臨地実習指導者研修に参加している指導者候補の看護師 8 名を対象とし、「臨地実習指導体験を語る会」の開催と事後インタビューを行った。

結果:その結果、「指導体験を語る会」では各々指導場面で印象に残っている場面を描写し、その時の患者や学生の反応の意味を掘り下げ、指導の在り方の意見交換を行った。

半構成面接の内容分析では、体験と学びの視点で分析を行い 286 コード、22 サブカテゴリーから [役割遂行に対する不安と期待]、[指導者としての患者への責務]、[学生と共に成長する臨地実習指導者]、[教員・スタッフ間の調整]、[日々の看護実践の課題の発見] の 5 つのカテゴリーが抽出された。

結語:臨地実習指導者は、役割遂行の過程において、学生理解の難しさや刻々と変化する臨地状況に合わせた看護実践の指導の難しさを体験していた。また、「患者の見方が変わった」「病棟の課題が見えた」「看護実践能力の向上が必要」など臨地実習指導者自身の成長も伺えた。しかし、迷った時に相談できる組織的な体制や指導体験を語る会をとおして教育指導能力の向上を図るなど、臨地実習指導者の成長を支える支援が必要である。

索引用語: キャリア発達、キャリア発達支援、臨地指導者

Key words: career development, career development support, clinical training instructors

1. はじめに

近年、保健医療福祉を取り巻く社会ニーズは多種多様となっている。臨地実習を取り巻く環境も疾病構造の変化、入院期間の短縮、患者自身の権利意識や実習教育に協力することへの拒否権の行使などが

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 順天堂大学医学部附属静岡病院

1) *Juntendo University School of Health Sciences and Nursing*

2) *Juntendo University Shizuoka Hospital*

(Jan. 12, 2013 原稿受付) (Jan. 24, 2013 原稿受領)

あり、臨地実習のあり方や教育内容の見直しが必要とされている¹⁾。

看護学教育において臨地実習は、学内で学習した知識と技術を実践と結び付ける重要な授業である。臨地実習での経験が学生の成長に大きく影響することから、教育と実践をつなぐ意味で大学と臨地実習施設との連携と協働が求められている。

臨地実習指導を担う教員の能力について、秋元²⁾は「臨地実習において学生が看護へ動機づけられるのは、何よりも臨床というリアリティーの中で学生の主体的看護実践を保証することである」と述べている。さらに、厚生労働省³⁾でも教育実践能力と看護実践能力、コミュニケーション能力、マネジメント能力が必要と提言している。また、臨地実習指導者（以後、指導者と略す）には、学生に日頃の看護実践を学生に伝えること、看護実践での判断や意思決定の思考プロセスを語り伝える実践者であること、学生の看護の学びを支援することが重要であることから^{4) 5) 6)}、指導者に求められる能力として看護実践能力はもとより、学生の個性を認め成長をサポートする教育実践能力が求められていると考える。

キャリア発達について文部科学省⁷⁾では、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖およびその過程における自己と働くことの関係付けや価値づけの累積」としている。また、勝原⁸⁾は看護のキャリア発達について、キャリアの選択と決定に自己責任を持つ自立した看護職個人が、ライフステージとの関連で捉えた職業生活において、自らの看護専門性の向上への期待を組織との調和の過程で最適に実現していくプロセスとしている。これまでキャリア発達、キャリア開発に関する研究の多くは中堅看護師、スペシャリストの育成などに焦点をあて、中堅にある看護師の豊富な経験から各施設で重要な役割を担い、期待される状況にあるとの報告されている^{9) 10)}。また、指導者は、学生との関わりの困難さを

感じながらも、指導方法のスキルアップを図り、学生と指導者が共に学び成長する関係の発展を期待している¹¹⁾。さらに指導者への組織的なサポートの必要性も示唆されている^{12) 13)}。

以上のことから、指導者としてのキャリア発達が求められている一方で、指導者は、役割遂行の過程で学生理解の難しさや刻々と変化する臨地状況に合わせた看護実践の指導の難しさを体験している現状にあるといえる。したがって、指導者として「看護実践を具現化しそれを教育的に学生に伝える能力、学生の成長を支える教育指導能力」³⁾の向上を組織的にサポートしていく必要があると考える。

II. 目的

本研究は、臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラム構築の基礎的な研究と位置づけ、病院内における臨床実習指導者研修を受講する看護師の臨地実習指導の体験をとおしての学びを分析し、キャリア発達支援プログラムの課題を明らかにすることを目的とする。

【用語の意味】

本研究におけるキャリア発達とは、指導者として新たな立場や役割の遂行の過程で成長を目指すことを意味する。

本研究におけるキャリア発達支援プログラムとは、臨地実習指導者としてのキャリア発達を目指した組織的かつ系統的に計画された現任教育プログラムのなかの臨地実習指導者研修会を意味する。

臨地実習指導者の体験とは、指導者として新たな立場や役割の遂行の過程で、看護学生、病棟看護師長・看護師、看護教員、教育課スタッフ、他の医療従事者との関係性の中で生じた事実現象とそれに対する感情、思惑、思考を含んだ本人の出来事とする。

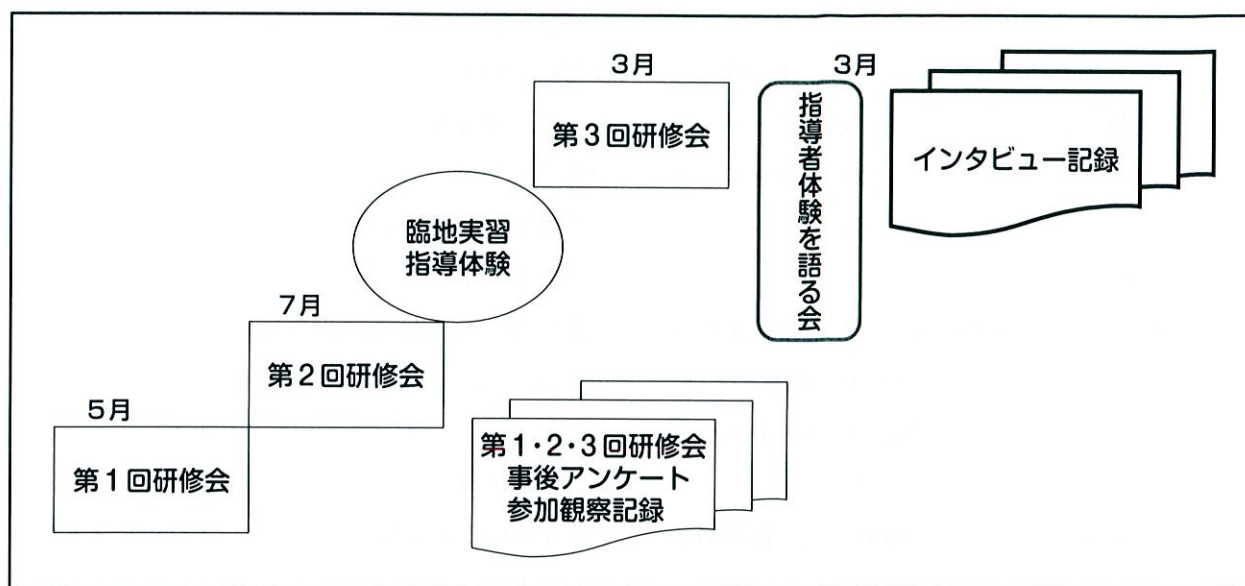


図1 臨地実習指導者のキャリア発達プログラムとデータ収集

表1 事後インタビュー時の半構成的面接ガイド

1. 臨地実習指導者を任命された当初は、どのように受け止めましたか。
その時の感情や思いを思い出せますか。
2. 看護学生をどのように捉えてきましたか。
また、臨地実習指導をとおして捉え方に変化はありましたか。
その変化はどのような状況や出来事から、そのように思いましたか。
3. 臨地実習指導者の役割遂行上で楽しかったこと、またやりがいを実感した出来事の場면을教えてください。
4. 臨地実習指導者の役割遂行上で困難な事や出来事の場면을教えてください。
その時、どのような対処を行われ、どのように解決しましたか。
5. 臨地実習指導者の研修会で、自分に影響したと思う出来事がありましたか。
6. 臨地実習指導者としてのキャリア発達の支援が必要と思われる内容や方法を教えてください。
7. 臨地実習指導者としての自分に語りかけたいことばを教えてください。

III. 方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究デザイン
2. 研究期間：平成23年7月～平成24年3月
3. 研究対象：某大学附属病院の現任教育プログラムの一つである臨地実習指導者研修に参加している看護師16名のうち、同意を得た8名である。
4. 調査内容

臨地実習指導者のキャリア発達プログラムと本研究の調査内容を図1に示す。本研究では、「臨地実習指導体験を語る会」での内容および事後イン

タビュー内容の分析を試みた。

5. データ収集方法

1) 「臨地実習指導体験を語る会」は、印象に残っている指導場面の描写について語り合い、描写された場面の患者や学生の反応の意味を問いながら、指導者の在り方の意見交換をおこなう。参加観察用紙を用いて討論の流れを記録した。

2) 事後インタビュー

半構成的面接ガイド(表1)を用いて研修会および「臨地実習指導体験を語る会」終了後、研究

参加者に対して研究代表者がインタビューを行う。インタビュー内容は許可を得て、ICレコーダーに録音し逐語録に書き表す。なお、ICレコーダー録音を拒否した1名に対しては、対話内容をメモする許可を得て、その内容を分析対象とした。

7. データ分析方法

- 1) 「臨地実習指導体験を語る会」や「事後インタビュー」で得られた内容を“指導者の体験と学び”の視点でコード化を行い、類似するコードをサブカテゴリ、カテゴリにまとめる。
- 2) 1)の結果から指導者に類似した「指導者の体験と学びの構造」を導き出す。
- 3) 臨地実習指導者研修がキャリア発達のための支援プログラムとしての成果と課題を抽出する。
- 4) 逐語録とまとめた内容を研究参加者に提示し、分析内容は共同研究者に意見を反映させ信頼性と妥当性の確保に努めた。

IV. 倫理的配慮

研究目的および方法、任意参加、匿名化、途中辞退保証、結果公表について文書および口頭で説明し同意書を得た。インタビューに際してはICレコーダー録音の承諾を得て行った。また、インタビュー内容を分析する際、研究参加者に逐語録内容の確認を行った。順天堂大学保健看護学部研究倫理委員会および研究実施施設内看護部の倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 結果

1. 対象者の背景

対象者は女性8名で26歳～35歳、平均年齢は30歳であった。臨床経験は5年～11年平均経験年数は7.6年であり、その内7名は初めて臨地実習指導を担当した。

2. 「臨地実習指導体験を語る会」

「臨地実習指導体験を語る会」は1時間、各々指導場面で印象に残っている場面を描写し体験を語り合った。描写場面はケア実施、学生の態度、患者と学生との対話、カンファレンスの場面であった。ケア実施場面では、新生児室において『泣いていた赤ちゃんがケア後に笑顔になったときに助産師を志して良かった』という学生の反応を見て、私もうれしかった。という場面で、成功体験を共にすることやケアのモデリングになることの大切さを共有した。また、「患者とコミュニケーションがとれない場合は『今まで生活のことを聞きに行きましょう』と学生を誘った」ことで、「学生にとって会話のきっかけ作りになっている」などの意見が交わされた。

3. 事後インタビューの内容分析

一人あたりの事後インタビュー時間は、40～50分であった。インタビュー内容を逐語録に書き表した後、臨地実習指導体験と学びの視点から286コード、22サブカテゴリ、5カテゴリが抽出された(表2)。以下、主なコード・具体的な記述「」、サブカテゴリ〈 〉、カテゴリ【 】で示す。

指導者は臨地実習指導担当を任命されたとき、「指導者に対する怖いマイナスイメージ」や「厳しさが当たり前」の状況で、「患者さんというより指導者に怒られない看護を考えていた」といった、〈学生時代に受けた指導のトラウマ〉が回想された。また、「慣れていない病棟で指導ができるだろうか」、「知識・技術が未熟」で「学生に教えるのが怖い」、「指導しなければという気負い」といった〈看護実践能力と指導力の自信のなさ〉を抱きながら、一方では、「患者との関係の中で学んでほしい」、「色々体験してほしい」と願っていた。さらに、「面白みと憧れ」と「指導者としての自分への期待」も抱き、〈指導をとおして自らの成長への期待〉から【役割遂行に対する不安と期待】が抽出された。

表2 臨地実習指導者の体験と学び

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
役割遂行に対する不安と期待	学生時代に受けた指導のトラウマ	「指導者に対するマイナスイメージ」 「臨地実習は厳しさが当たり前」 「患者中心よりも指導者に怒られない看護を考えた」
	看護実践力と指導力の自信のなさ	「慣れない病棟で実習指導ができるか」「知識を学生に教えるのが怖い」 「知識・技術が未熟」 「指導しなければという気負い」
	臨地実習ならではの学びを体験して欲しい	「学生には実習で色々体験して欲しい」 「患者との関係のなかで学ぶ」
	指導をとおして自らの成長への期待	「臨地実習指導への面白みと憧れ」 「指導者としての自分に期待」 「指導する機会を与えてもらっている」
指導者としての患者への責務	健康回復への支援	「患者に対するケアの責任」 「看護は患者の生命にかかわる」
	安全・安楽なケアの提供	「患者の安静に安楽に過ごせるケアの創意工夫」 「患者の状態と学生の技術レベルに合わせたケア参加の度合いの工夫」
	ケア時の状況判断	「患者の反応と学生のケアが大丈夫かと判断しながら、いつでもケアに参加できる位置にいる」 「患者のちょっとした反応に対応できる」
学生と共に成長する臨地実習指導者	指導案の意味と必要性の実感	「指導案は指導の道標」 「何をどのような場面で、学習することができるかを意図的に考えられる」
	モデリングになる	「患者の状態を判断し、根拠をふまえたケアを見せる」 「学生が患者と対話できない時は、話のきっかけをつくる」
	出来事の意味づけをして教材化を図る	「ケアを拒否された時の学生へのフィードバック」 「患者の言動や表情を観察し、その意味を探る」
	ケア技術の振り返り	「ケアが患者にとって安楽で効率的であったか質問する」 「うまく出来なかった時、原因や問題を共に考え明確にする」
	学生への対応や質問の工夫	「質問に対して反応がない時のタイミングが難しい」 「考えを引きだすような質問が難しい」 「知識を問う質問が多くなる」
	カンファレンスでの学びの共有	「カンファレンスでの意見交換を行えるように促す」 「学生の意見に気付かされる」
	リフレイミング	「物事の見方を変えることが大事」 「指導の実際を振り返り、関わり方の引き出しを増やす」
教員・スタッフ間の調整	実習目標の理解	「実習目標と病棟で何を学ぶことができるか、その関連を考える」
	実習前準備	「実習目標をふまえた受け持ち患者の決定を調整する」 「学生の達成目標を教員と統一する」
	学生のレディネスの把握	「学生の理解力と性格が事前に分かるとよい」 「学生の性格によって受け持ちの患者を考える」
	看護の方向性を共有する	「学生と看護師との間における患者へのケアの考え方の仲介」
	ケア参加の調整	「看護師へ協力を依頼する」 「他の医療従事者へ見学の依頼をする」
	学習状況の共有	「看護師へ学生の学習目標やケアプランを伝える」 「実習体験の深まらない学生の課題と達成目標を教員と共通認識する」
日々の看護実践の課題発見	日常生活行動への援助の在り方を見直す	「学生のケアをとおして患者の理解が深まり、援助につながる」 「入院生活における患者の活動や生活リズムを整える」
	実習環境の在り方を考える	「受け入れる側の準備を病棟・病院全体で取組み、目的を共有しながら全体で指導する」 「実習指導と他患者の受け持ちやスタッフ業務の重なりで負担」

看護実践の指導者として「患者に対するケアの責任」、「看護は生命にかかわる」ことから、「患者の反応と学生の技術レベルに合わせたケア参加の度合いの工夫」や「きちんとしなければいけない」といった健康回復への支援〈安楽なケアの提供〉を行っていた。ケア場面では、「患者の反応と学生のケアが大丈夫かと判断しながら、いつでもケアに参加できる位置いる」、そして「患者のちょっとした反応に対応できる」ように〈ケア時の状況判断〉など、【指導者としての患者への責務】が抽出された。

指導者は役割遂行の過程において、「何をどのような場面で、学習することができるかを意図的に考えられる」「指導案は道標」といった〈指導案の意味と必要性の実感〉、「根拠をふまえたケアを見せる」など〈モデリングとなる〉、〈出来事を意味づけして教材化を図る〉ことや〈ケア技術の振り返り〉を学んでいた。しかし、「質問に対して反応がない時のタイミングが難しい」「考えを引き出す質問が難しい」〈学生への対応・質問の工夫〉×カンファレンスでの学びの共有〈リフレミング〉の必要性から、刻々と変化する臨地状況に合わせた看護実践の指導の難しさを体験しながら、【学生と共に成長する臨地実習指導者】が抽出された。

指導者は指導案を作成するにあたり、「大学の示す実習目標とこの病棟で何を学ぶことができるかの関連を考える」、「実習目標をふまえた受け持ち患者の決定を調整する」、また、「学生の達成目標と教員と統一する」といった〈実習目標の理解〉〈実習前準備〉を行い、実習指導の実際では、〈学生のレディネス把握〉し、「学生と看護師間における患者へのケアの考え方の仲介」や「看護師へ協力を依頼」したり、「他の医療従事者へ見学を依頼」したりといった〈看護の方向性の共有〉〈ケア参加の調整〉を学んでいた。また、「実習体験が深まらない学生の課題と達成目標を教員と共通認識する」といった〈学習状況の共有〉か

ら【教員・スタッフ間の調整】が抽出された。

さらに、日頃の看護実践について「麻痺のある患者が人から介助されること抵抗感、羞恥心、麻痺を受け入れられない心情を持っていることを初めて学生を通して理解できた。私たちのこれからの援助につながることもある」や「腹水貯留で積極的治療の段階でない患者が学生と接することによって、表情が良くなり、患者から車椅子に乗ってみると話された。一日の生活のリズムを見直す」など〈日常生活行動への援助の在り方〉の振り返り、「受け入れる側の準備を病棟・病院全体で取り組み目的を共有しながら全体で指導する」といった〈実習環境の在り方〉から【日々の看護実践の課題発見】が抽出された。

VI. 考 察

以上の結果より、臨地実習指導の体験と学びが明らかになった。それに基づいて、指導者としてのキャリア発達支援プログラムの成果と課題を考察する。

1) 指導者の体験と学びの構造

指導者の体験と学びについて、指導者は〈臨地実習ならではの学びを体験してほしい〉と願い、〈指導をとおして自らの成長への期待〉を抱き、新たな役割を担おうとしていた。しかし、一方では〈学生時代に受けた指導のトラウマ〉によって、新たな【役割遂行に対する不安と期待】を抱きながら臨地実習指導を行っていた。看護実践では、看護師として〈安全で安楽なケアを提供〉することを第一優先に考え、学生のケア計画のアドバイスや、〈ケア時の状況判断〉をしながら、時にはケアを中断し【指導者としての患者への責務】を果たしていた。また、臨地実習の目的・目標を達成にむけて【教員・スタッフ間の調整】、【日々の看護実践の課題発見】をしながら【学生と共に成長する臨地実習指導者】が存在していたことが見出された。

2) 学生の『わかる段階』での意図的な関わりと『教

材化』することの学び

看護教育において臨地実習は、「看護の方法について『知る』『わかる』段階から『使う』『実践できる』段階に到達させるために看護教育においては不可欠な学習課程である」¹⁴⁾。研究者らは、臨地実習において『実践できる』段階に到達させるためには、『わかる』段階での意図的な関わりと教材化が重要と考える。そのために、指導者は「何をどのような場面で学習することができるかを意図的に考えられる」教育実践能力が必要であり、道標となるく指導案の意味と必要性を理解することは重要と考える。

たとえば、学生が発熱している高齢者を受け持った際、臨床医学や看護の講義内容を復習し、『わかったつもり』で臨地実習に臨む。しかし実際には、患者の情報と知識を統合してケアを具現化することは難しい。ケアプランでは「水分摂取を促す」と立案するが、患者のアセスメントに基づき、どのくらいの量を生活リズムの中で、どのように促すかという具現化は難しい。西村¹⁴⁾は、「わかったつもりの状態をこわして、わからない状態を出現させ解消させていく過程で情報が増え、解釈が深まり『よりわかった』認識の状態へ移行していく」と述べている。つまり、学生は知識として「発熱している高齢者に水分を促す」ことは『わかったつもり』であっても、アセスメントに基づくケアを『実践できる』までの具現化には至らない。そこで、指導者の「何をどのような場面で学習することができるか」を意図的に考えた助言により、学生は患者に必要な水分量を計算し、生活リズムに合わせた水分摂取のケアが『実践できる』までの具現化することにつながる。学生は発熱する高齢者とおして、水分を促すことの解釈が深まり、『わかったつもり』から『よりわかった』という確かな知識と技術を修得することができると思う。

指導者の体験と学びにく出来事を意味づけして教材化を図るくことが抽出された。「ケアを拒否された時

になぜだろう」、また「赤ちゃんを怖いと思っている時とビクビクしないで触れた時の赤ちゃんの反応の違い」について学生と共に内省し、その意味付けを行っていた。安酸¹⁶⁾は、教材化について「学生が経験した事実あるいは現象から典型的で具体的なものを素材として切り取り、学生との対話により教材化して教授＝学習活動を展開していく」と説明している。また、黒田ら¹⁷⁾の調査でも指導者に身につけさせたい能力として、「経験を教材化する能力」を挙げている。本調査でも、看護基礎教育課程での実習では、学生が経験できることには限界があり、「実習で学んだことは覚えているので、学生には色々体験してほしい」「患者との関係の中で学ぶ」などく臨地実習ならではの学びの体験を意味づけして、教材化を図っていくことの重要性を指導者は学んでいた。

3) 病院内における指導者としてのキャリア発達支援の成果と課題

本研究フィールドでは、病院内において臨地実習指導者研修会を開催している。毎年、受講生は16名～18名である。その目的として①指導者になるための知識・技術・態度を学ぶ。②看護学生の役割モデルとなり指導できる指導者の育成として3回にわたり講義・グループワークで構成されている。第1回は、臨地実習指導者に必要な現知識として現在の看護教育と題して、大学教員が講義を行った後、指導者としてどうあるべきかをグループワークをとおして明らかにする。第2回は実習指導案の作成、第3回は臨地実習指導を体験しての学びの発表会である。

本研究の「臨地実習指導体験を語る会」と事後インタビューは、第3回が終了した後に実施した。その結果、「指導案は道標」「何をどのような場面で学習することができるかを意図的に考えられる」というようにく指導案の意味と必要性を実感する反応があり、実習指導案の作成は、指導時に直接的に役立つ内容であったといえる。さらに、「学習する機会を与えても

らった」と好意的に受け止め、く指導をとおして自らの成長への期待や「患者の見方が変わった」「病棟の課題が見えた」「看護実践能力の向上が必要」など【学生と共に成長する臨地実習指導者】が存在していた。

しかし、「知識を学生に教えるのが怖い」と感じたり、自分自身の「知識・技術が未熟」さから、指導を模索しながらも「質問に対しての反応がない時のタイミングが難しい」「考えを引き出すような質問が難しい」と感じ、く看護実践力と指導力の自信のなさで【役割遂行に対する不安と期待】を抱いていた。これらのことから、指導者に対する組織的な研修会¹⁾に参加することが望ましい。しかし、厚生労働省の指導要領では8週間240時間¹⁹⁾、静岡県看護協会主催研修会では40日間240時間²⁰⁾であり、一施設で複数の指導者を受講させることは難しく、病院内で指導者としてのキャリアアップ支援プログラムの充実を図ることが重要となる。また、泊ら²¹⁾が「指導者になってからの研修・講習は、指導力が不足であるという実習指導に対する自己のマイナス思考が払拭される」と述べているように、研修会と並行して、迷った時に相談できる組織体制や「各自の取り組むべき現状に関するリフレクションや意見交換」²²⁾の機会として、指導体験を語る会が必要と考える。指導者が自らを高めようとする姿勢を持つことで、結果において、学生を育むことにつながることから、「指導者の自己研鑽の機会を提供していく」²³⁾ことをねらいとした、指導者の成長を支える支援が必要と考える。

VII. 結 論

1. 臨地実習指導体験で印象に残った場面の描写では、ケア実施、学生の態度、患者と学生との対話、カンファレンスの場面であった。
2. インタビューの内容分析の結果、[役割遂行に対する不安と期待]、[指導者としての患者への責務]、

[学生と共に成長する臨地実習指導者]、[教員・スタッフ間の調整]、[日々の看護実践の課題の発見]の5カテゴリーが抽出された。

3. 臨地実習指導としてのキャリア発達支援プログラムの課題の一つとして、迷った時に相談できるサポート体制、教育実践能力の向上を図る支援が必要である。

謝 辞

本研究にご協力くださいました臨地実習指導者の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究は平成22年度順天堂大学保健看護学部研究の助成を受けて行った。

引用文献

- 1) 佐藤禮子：看護学教育の教育環境に関する実態と質向上に資するための提言，日本看護学教育学会誌 19, 87-148, 2010.
- 2) 秋元元子，森本美智子，森恵子：看護への動機づけを促進する臨地実習指導の方法，Quality Nursing, 10(8), 49-55, 2004.
- 3) 厚生労働省：今後の看護教員のあり方に関する検討委員会検討会報告書，2010.
- 4) 村島さい子：実習生の経験と向き合う臨床実習教育，看護教育, 42(2), 94-98, 2001.
- 5) 伊藤寿満子：これからの臨地実習 安全で効果的な進め方-効果的な臨地実習のために-，Nursing Today, 20(10), 27-29, 2005.
- 6) 屋宜譜美子，目黒悟編集：教える人としての私を育てる-看護教員と臨地実習指導者-医学書院，130-155, 2011.
- 7) 文部科学省 中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申案）第1章キャリア教育・職業教育の課題と基本的方向性，2010.

- 8) 勝原裕美子：看護師のためのキャリア論（第1回）
キャリアとは(1)看護師とキャリア, 看護実践の化学30(4), 70-73, 2005.
- 9) グレグ美鈴, 池邊敏子, 池西悦子他：臨床看護師のキャリア発達の構造, 岐阜県立大学紀要, 3(1), 1-7, 2003.
- 10) 辻 ちえ, 小笠原知枝, 竹田佐知子, 他：中堅看護師の看護実践能力の発達過程におけるプラトー現象とその要因, 日本看護研究学会誌, 30(5), 31-38, 2007.
- 11) 山本晴美：臨地実習指導者が社会人経験のある学生に対して抱く思いや期待, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 35, 76-83, 2010.
- 12) 高島尚美, 渡部節子, 青木由美恵他：成人学習者としての経験を活かした臨地実習指導者研修プログラムにおける学びの様相, 横浜看護学雑誌, 1 (1), 35-43, 2008.
- 13) 亀山直子, 水戸美津子：臨地実習指導者の教育活動と学習ニーズー 2003 年度東京都実習指導者研修受講者を対象とした調査ー, 山梨県立看護大学紀要, 7, 2005.
- 14) 文部科学省報告書「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」, 2002.
- 15) 西村克彦：「わかる」のしくみ～「わかったつもり」からの脱出, 114-115, 新曜社, 2003.
- 16) 安酸史子：臨地実習における教材と教材化, 藤岡完治, 安酸史子他著：学生とともに創る臨床実践指導ワークブック, 第2版, 医学書院, 20-31, 2001.
- 17) 黒田久美子, 和住淑子：臨地実習指導の充実に向けた看護系大学と臨地実習施設の協働のための研修ニーズ-看護系大学・臨地実習施設への質問紙調査より-, 千葉大学看護学部紀要, 23, 69-74.
- 18) 渡部菜穂子, 一戸とも子：看護学実習における臨地実習指導者の「看護実践の役割モデル」の認識, 弘前学院大学看護紀要 6, 1-10, 2011.
- 19) 厚生労働省：都道府県保健師助産師看護師実習指導者校友会実施要領
- 20) 静岡県看護協会：平成 25 年度臨地実習指導者講習会, <http://www.shizuoka-na.jp>
- 21) 泊裕子, 栗田孝子, 田中克子：臨地実習指導者の指導経験による“指導のとらえ方”の変化と必要な支援の検討, 岐阜県立看護大学紀要, 10(2), 51-57, 2010.
- 22) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践センター：教育-研究-実践をつなぐ臨地実習施設の看護学教育指導研修プログラム, <http://www.n.chiba-u.jp/center/program>.
- 23) 山田智子, 堀井直子, 近藤暁子他：看護学生の認知にする臨地実習での効果的・非効果的な指導の関わり, 生命健康科学研究所紀要, 17, 13-23, 2010.

Original Article

Summary

A Basic Study on the Establishment of a Career Development Support Programs for Clinical Training Instructors at A University Hospital

KONDO Fusae¹⁾ TANAKA Hitomi²⁾ HORIGOME Katsuyo²⁾
SASAKI Shino¹⁾ HAMAGUCHI Machhiko²⁾ KUWAMURA Junko¹⁾
TSUCHIYA Kiyoko¹⁾ INATOMI Keiko¹⁾

1) Juntendo University School of Health Sciences and Nursing

2) Juntendo University Shozuoka Hospital

The present study aimed to clarify issues in career development support programs for nurses enrolled in training programs for clinical training instructors at hospitals by analyzing the points nurses had learnt through their experiences in clinical training instruction. A seminar entitled “Sharing experiences in instruction” and semi-structured interviews were conducted on a total of eight nurses participating in a training program for clinical training instructors at a university hospital.

During the seminar “Sharing experiences in instruction”, memorable situations from various instruction settings were depicted, and the meanings of the reactions of patients and students in these situations were analyzed followed by a discussion of ideal instruction methods.

Content analysis of semi-structured interviews was performed from the perspectives of experiences and learning, and the following five categories were identified from 286 codes and 22 subcategories: “anxiety and expectations toward role fulfillment”, “responsibility toward patients as an instructor”, “the growth of clinical training instructors with students”, “coordination between teachers and hospital staff”, and “identification of issues in daily nursing practice”.

Over the course of role fulfillment, clinical training instructors experienced difficulties in promoting the level of understanding among students and providing appropriate nursing instructions for the constantly changing clinical circumstances. In addition, the growth of the clinical training instructors themselves was also observed, including “developed a new view of patients”, “identified issues in the ward”, and “realized the need for improvement of nursing ability”. We thought that necessary to support the development of clinical training instructors by enhancing their ability to provide instructions through systems for providing support as needed and seminars for sharing experiences in instruction.

Key words : Career development , Career development support , Clinical training instructors